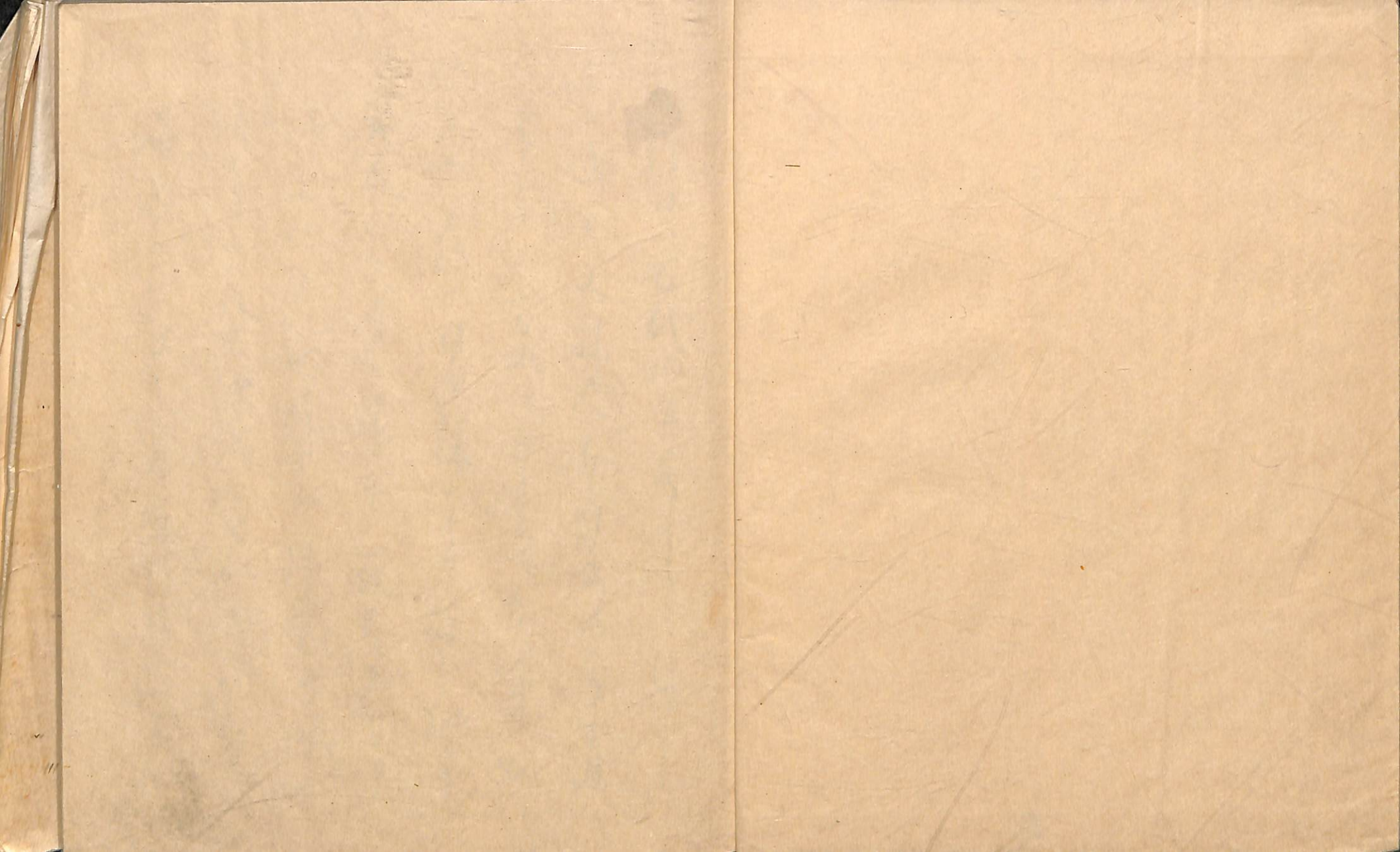


911.32

↑





月日は百代の過ぎたりてしる
よと又旅人なりしよりの生涯
よとよとの口とて老をむ
よと物に里旅して旅を極とす
右人多く旅に死地をたり
予といふれのおり片雲の風よ
りりりて漂泊のよひや戸す
海濱よとてよとよの秋江上の

破をりし松の古葉をこしひいて
やいふもなきよきまのまのつらよ
白川の園に人としらゆゆの地よ
ほきく河をくまらむをぬゆのま
さよあひてあよのまよつらり
引の破をつりし玉の綿付を
よまよゆゆゆゆゆ松の月先河
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

別墅よ移り

草のきりも位替り代をひきの家
面八句をよる此柱よぬまゆま
未の七日明らゆゆゆゆゆゆゆ
左明よて光おさ下れるあゆゆ
不二の峯遊よみそ上野谷中の
毛の梢又いつつこも心ほそひ
きつゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

衆人送るふしゆと云ふりて松
を折られたる方途三千里の砂に
狗ふさうりて幻のちまきこり
離別の涙をう〜

以春や香瑞一魚又月ハ潤
そを笑立のゆりて行道を
すまは人ハ逢中よ立ち〜
てほふの〜ゆ〜と〜と〜と送る〜

こら〜元禄二らせう和奥村長途
の以脚只うりうちよとよいきちて
呉てよ白髪の恨とまぬといふ
耳はゆきていさ〜と〜えぬさ〜
美生でゆ〜と〜定ちう〜
をうけて其日早加と云宿りり
せ〜り〜と〜り〜疲背の肩よ
〜れ〜ゆ〜先〜と〜と〜と〜

しし出立侍を糸子一夜八夜の
防さゆし雨具異筆筆のたぐひ
阿るいさりくさ餓ふくささるか
さすりよ弁持くくして浮気の花と
うれるこふりりるるね

室のハ鴉は清く同行常えり曰此
沖ハ木のむはくや娘の牛とトト
富士一峰く並戸室よ入て焼る

ちういのみ中よ火の出見のみと
生れ多ししうり室のハ鴉とトト又
燈を讀むの傳しめ謂也將
このちうとくふ魚を禁す縁記
の音世よ傳ふ事と傳し

廿日日光山の林よ泊る阿るし
ふくさくふくさるを佛みたつと云
萬三並をうりとするれよんくハ

中侍のまじり一夜のまじり松を斬解て
体とありといふある佛の濁世塵土
示現してゐる衆門の念願礼
こころの人をきこけりありあり
ありありのふすりありありあり
ありあり唯ぞ智さいありあり
並偏固の者も剛毅木訥の仁
とくそくし氣稟の清質をさ

ゆり

卯月知日清山と清くは昔は
清山と二荒山と書しを空海
大師開基の時日々と改るる
歳未末をいりありありあり
清光一夫よりいりて因心沃八荒
ありあり四民と地あり極徳あり
於此多くて筆をいりあり

何〜き〜と昔日葉の葉又日の光
黒髪山の字風〜して雪い〜
白〜

判作て黒髪山〜衣あは

曾良ハハ合々〜と云
芭蕉ノ下葉ノち〜
新ノ方々をき〜
松〜象波の眺共よき〜

収し且ハ霧旅の難を〜
旅立曉髪を判て黒染め〜
〜と云〜
仍て黒髪山の句と云えん
二字力けりて〜

其餘下山をきつて溪と岩洞の
頃〜流〜而人々岩の跡
潭と落〜岩空性も〜

入し滝の裏よりそれつうらふの籠
とP傳し傳る也

暫時ハ流みぬるや夏のゆ
那須の宮もねと云ふも知人おれハ
そより整然とつりて玉るる
ゆんとすきさる一村をえりけて
此は雨降日暮る農夫のまよ一
夜をうりて明れハ又野中一を

りちとよ野飼のるちり美刈
おのこよちけさるぬハ跡史といへ
ととすすりハ情をぬよハ非を
いすすいさやれとけ跡ハ縦横
まつれてくるく変旅人のる
ふも昔しんあやハ跡ハける
のこもる所もてるとは引くと
うし跡ちちいふる者ゆりまの

入し滝の裏よりそらつらふの籠
とP傳し傳る也

暫時ハ漸いぬるや夏のゆ
那須の宮もねと云ふは知人なれハ
是より野越はつうて五ふり
ゆんとすきこみ一村をえりけて
此は雨降日暮る農夫の家は一
夜をりて明れハ又野中を

ゆきとよ野飼のるあり兼刈
おのこよちけさし水ハ蹄丈といへ
ととすすうは情をぬま非を
いすすきやれとけ蹄ハ縦横
おつれてくるく変旅人のるこ
ふき中しんあやしく結れハける
のこもる所もてふるまは引くと
うし結らちちいふこ者ゆりよめ

たきいしきしき枯ハ小堀りて
名をかしよと云すアれぬ名ハ
ヤコシヨリカレバ

一ヨヨトハ室櫃子の名カキテ

ルテ人里ヨリカレハあふれを結
つたよ結ひけてちとゆいぬ

黒羽の館代津坊ちゆいしの方よ
音位ヨリカレハあふれしつて

日夜語つけて具才概観か
云う胡ッ勤ましし自の家よ
之付して親属ノ言めしちゆい
重目を坊まきしよ口とし郊外
も道遠して大追物のあをきし
北須のい條系をりて玉三條めお
の古墳をいふアれなりハ幅定よ
福与市意の的を射し時おして

永正氏沖正公等んとちうしし
け沖社にて信とすハ感應聖志
うしよまきくらすきれハ桃翠宅
一 鳴る

修驗克明寺と云有うとこま
孫れてけ者堂を印す

夏山は足跡をねむ首途外
常山す岸古のたくと佛頂和尙

山居の記あり

堂横の五人の寺々々々々の名
むす毎とらや一雨なうとまハ

と松の西戻しう岩の書ハけけりといつ
うやましう具跡えんと雲岸
ちま杖を曳かんくすんで共ま
いさういさう人かかくるのほと
千さうさうてのけくす彼林下まま

木啄も店はやす友木立

とそり阿一むを柱に結し

是より殺生石より館成り

ふりて送るる口付の短冊

はるをいといやうさるを全

ゆかりのうふと

跡を横より幸もけし

殺生石の温泉の出る山陰あり

山はわくあさりしうまて谷名
色は松枝思く苔さしうて卯
月の天今相定き一十景つら
木橋をとりし川て山門は入
さてうれあといいつくみうとよとほ
の山よりうのりね石上の小菴岩
窟よりむしひふりし如禪師の死冥
法中法師の石室をくまうりし

木啄も店はやあす友木立
とそりあへぬうを柱よ結し
そりし殺生石より館伏り
うりて道くくく口付のあ短冊
はをせしと乞やうしさるりをは
ゆりりのうふと

跡を横よる年むけよ
殺生石の温泉の出る山陰もあり

石の毒いせいいせいいせいいせいいせいす蜂
蜂の毒いせいいせいいせいいせいいせい
いせいいせい死す又清いせいいせいいせい
柳ハ葦路一の里いせいいせいいせい田の畔
よれよれの郡守いせいいせいいせい某の
け柳いせいいせいいせい柳のいせいいせいいせい
いせいいせいいせいいせいいせいいせい
いせいいせいいせいいせいいせいいせい

立寄り侍つれ

田一牧植て立居る柳いせい

心侍いせいいせいいせいいせいいせい
の園いせいいせいいせいいせいいせい
都いせいいせいいせいいせいいせい
比園いせいいせいいせいいせいいせい
心いせいいせいいせいいせいいせい
お祭いせいいせいいせいいせいいせい

断してさく——と云ひあつてさす

凡流のゆやねくみの田植

そとよとらんともすつとととつねを

胸才ととつりて三巻とつりぬ

け病の傍より大うある粟の赤陰

とまのいして世をいとも傍を操り

うをたふとつやと同一と云はれて

りよとせけゆる具詞

粟といふ文字の西の本とて

西方浄土にはありといひ是を薩

の一生杖下とねると云を

まといや

世の人々足付ぬ美や軒の粟

等宿窮く宅を出て又里中松皮の

宿を離れとてあさり山を路り

とてしあつり泥多しうらみ川に

とやい進くまたいつ世の美を

美らこはえと人こはあわれ
くし文知人かーし浪を尋人し
こゝろこくと尋ちりさてせ
ふの傍よりりぬ二本松より右
きまきー黒塚の岩を一見し
福崎の宿ちあつたふのふりし摺
の石を尋て見ふの山とよあ
逢山陰の小里の石ま土ま輝て

けりー里の臺アのまありてあ
昔いけふのしよゆーを佳木の人の
麦まとおーして石をこ試付をこ
うらてけ谷まつさる石の
西下さすよあーりくとえこり
へさこりーや

早苗とさよりしや音三のむ摺
月の輪のりしーを越して旅の上と

え宿は出川佐藤庄司の旧跡を
たの山陰一里半中にお飯塚の
跡跡とすて居く此のまふと云
く一里ありしを在司の旧跡也其
の夫の跡と人の名及びまを
て洞をさへし又さるの古ちよ
一家の石碑を訪す中よと人の
塚と云く一先氣やあられとす

んくしき名のせよすまの物
ふと袂をゆくしつ澄波の石碑を
まをすしあすちよ入く茶を
乞へは實は義塚のまの奇をより
笑をさるし一什おとす

い及も冬のえ大月よる北島嶽
大月知日のまの夜飯塚よま
る温泉あられを湯に入く宿をり

此の土産、庭をなべてあし
きも負ふ人の灯とわらわらるる
よの火のけりる寝雨をさしきりて
外す夜よ入く雷鳴雨をさしきりて
降ておるよらりなり筆枝を
き程もさし眠りて持病はら
りて清入中よりえ短夜の
まじやしく明けを又旅立ち

昨夜の余故心すすするりて
兼那の澤よ出るをさしきり
未とさしきりておる病竟未
とくへと霧旅鳥土の行脚捨身
無常の觀念道路をさしきりて
の余すりとさき力柳よりま
路縦横り踏て伊達の大木
戸をさす筑摺白石の城をさ

の橋杭よりうらさるるうらやとに
まはよやねにげしはしり
海より代にあらは成あらしハ橋
建ちよぢぢぢぢは令將ふ歳
のうらそのふしてうらうら
松のうらうらうらうら

武隈の松をさしをこせは松
とらりの錢をさしうらうら

松よりねに二木を三月紙
みね川を流して仙をよ入あや
ゆくりや疎宿をりうらて又の
道るす寔は書工かまつとら
らうねうらうら者うすて知る人
よあうこの者よ比うらうら
名うらうを考を作れとて
一日あゆす宮城野の秋をり

あはて秋のまよとさしやし
玉田よりと群つる園あま
嘆くも也日影もりし松の林
入く實を木の下と云とる音
うらなぬけさへさふさふし
こころとハナハナ茶師堂天沖
の酒社やねてさるなれぬ
松崎塩りふれ亦く畫をさして送る

旦何の條にけり草鞋ニ
錢すたつと風流のしよめ
實はむりて具實を列す

あやめ科是は結ん草鞋の結
うの畫圖はまをてきとりし
なくの細るる山陰より十存
菱を今もてて十存の菱
を洞く園守は敵すといふ

と有聖武皇帝の正村を高水り
むうしよりしんをさるる花おほく
終終ふといへるも山崩川流てる
阿た下り石の埋て土まうこれ
木い老てる木まうしんの時移り
代更してさう初しうらまうぬり
のこを寝まよりて疑たうらふあ
歳の記念今眼あふま左人の心

ふもあしきしにふひきく福ふら
とて花ちうしうしうしうとさ
すうと急土の速風えれさるの
し建橋さきくくふ細垣戸
の明沖の法園守再興とくれ
て宮柱さくく彩椽さくく
うと石の階九段さきり朝の
帝の玉うさるさくくやうさるさるの

果登土の境うて中堂あしう
さしうすさふ昔玉の風俗あし
いと貴りれ中前さる古の室破る
ふねの戸ひしうの西は又作之年祭
之命奇進とさる百人よ来の侍
今日のおあさうしうしうしう
あし渠の勇義忠孝の士也佳名
今もまうてさるしうすといふ事し

誠人能道を勤義とて守りし
名しうしこしよとてふと云り日祝
年もちうし私とてしりて松崎より
其間二里餘雄雉の歌よつ
柝とてゆりまゝ水と松崎に投る
一の好風うして凡洞度西湖を駆
て東南より海を入て江の中ニ置
浙江の湖をまゝとて流すの歌を

直して歌りめは矢を折ゆりめ
とて波は圃圃とて二をよつとて
三をよつとてたよつとて右よつ
かゝる負ふあり 抱るあり 呪詛をす
りしり 松の根にやうり 投る
し風は吹くはうて屈曲をめつ
きりしりしりし 其まゝとて宵
として美人の顔を粧ふとて
振

神のむうし大山よものまをらり
りや造化のまをいつ世の人々
こころの詞をよきうけ

雄鴻の歌の北つさて海よ出る
鴻の雲辰源師の不堂堂の歌
唐祿石了有將ねのま能り
世をいよる人と稀くはるけりて
こほ極ねまふしけりてはるまの

奄田の住まひいふる人々を
そなたまふしえおひしき
かとは月海うりて昼の海
又あきむ江上りて宿を
求めの窓をひし二階を伝へ
風雪の中は旅夜すまふあり
しきりてぬきりてはるけり
松崎や露のまをね
けりてはるけり

予ハ口をとらして眠んとしていね
らしてすし旧唐をわくく時素堂
相傳の詩りり原安適松く
とまの和奇をと贈く袋を解て
こゝの友とすし且秋風濁子
茶臼ちり

十一日瑞岩ちり清南ちり三十二
世の青石壁のま四部出家して

入唐の胡の住同ふすくはよ

予唐祿師の住化に依て七堂

夢臥して金壁之壯巖光を輝

佛土成就の大伽藍とハる水り

彼見仏取聖のちハいつくもたと

十二日平和泉とすしつ松ちの松

流くくんの橋ちと中傳て人跡稀

は雄危菊菊菟の住ふるく

ともしつうす路の路少ききつて
石の巻とつし漆よおここの意候
とよみてきつる金花山海とよ
えつりし數百の廻入にはあつ
し人家地を何つうにして毫の
煙をたきつりしはうきすすつ
たつとよ水かゝ宿しんたれ
こ文の宿す人ありし下り

小家よ一夜をたつてゆれを
又こつぬるこまにりゆめつり
尾ゆりの牧場の若むつりたつ
りよみてきつる地をりしは
つとよみよつりて戸解つと
一宿して平家よむる其間北
余里かゝつたつち
三代の百葉羅一巻の中りて

大門の北一里にありて右有衝
うねり田路を成て金鶏山のそ
形を河下と云ふ館よのり水
北上川南部より流る大河也
衣川の和泉の城をわたりて館
の下より大河を渡り入る康衝亦
旧跡にあり園を隔て南部の
ことり 雲片夾をわたりてみたり

備し義にすくひては城りし

こりり 切名 一時の善取と云う園破

きて山河あり城春りて草

まきこりりと云ふ事なて時の

つる戸て洞をなすり作らぬ

夏草や兵と云う夢れは

卯の花を益房女ゆり白毛きん

益て耳路りしと云う二堂園懐

可憐堂の三將の像をのこし
光堂の三代の棺をゆり三尊の
佛を安置す七室ありて
珠の扉風よやめし金の柱
雪よ朽て既頽廢穴窟り叢
と成へうを四面新に圍て薨
と西渡て風を凌ぎ暫特を嵐
の記念とせられたり

二月雨の降りしりや光堂
南ア道をこぼりて山岩の
里よゆる小里の陰よりの小鳩を
こてりりるのゆりり 辰前のま
まよりて出ぬのまよ 越んこす
け路旅人稀 ありあふれを
美ちるあししりて海を
開きこす大山をのちりて日

祝著りれも封人のふとらん
うけて食を求む三日風雨
てらうらうらう中一は遠るす

春風ふれ旅する抱りし
阿のの云こそしり出ぬの身
大山を仰てるさうらうさ
れもるさうの人を救て越へ
さうしをぞさうらうて人を

新し作れ、究竟のさき昔反腸指
をふさうえ櫻の杖を推りてふく
先をさしてりさうあをみあや
うらうらうしあふさう日なれや
辛さうらひをふさうほまつい
し阿のの云もさうらうさう山
本さうらうて一鳥さうらうさう本の
下周岸うらひて夜さうらうらう

雲捲まつらぬる花——
い際の中踏むく 水をうら岩
に瀝て肌まつらぬる汗を流
して室上のまはるかひ かの
葉のきりおのこのえやくけら
必不用のまはるきさきをうり
まひらせて結念とらうとまらむ
まらぬれぬるまはるく胸ららるく

のこ也

尾毛澤して清風と云者を
ぬらまはるるのまらるきさき
すす都みしおのまらるきさき
すのま旅の情をし知らぬら
まらるて長途のつららるきさき
りてちり結る

涼さを戎宿してはるる

這出とらひ地の下しひさの
まのこころを休めておれ
茶洞すく人の古代まゝのまゝまゝ亦
山礼領と立るると云ふ山ちや少
慈覚大師の因基よりて津清
宗の比こ一見するさうし
のまゝむら依て毛を流す
と川てはら〜其間七里をらり也

口いさしきまの禁の坊より
まて山との堂よのほろ岩
巖とて重て山より松栢三四
お石とて昔清り岩上の院
扉を用て地の方きくくす岸
をらりの岩を遠て仏園をぬ
佳景寂寥とて心すむの
周より岩より入地なる

宿上川のしんと大石田と云ふ所
旧和を待た定まらば俳諧の程
と申れて是れぬ道のむらと云
し芦角一歩の心をやらしき
はるよさうりせしと新在り
道ようりききとくみら
きくす人しりねとわ
し一巻新しむらむの風流に
いよとれり

宿上川のからのくしり出て山祇
と水とすとこしんもわゆるか
おしりし難取と板敷山の小
と流て果は酒田の海は入左右山
覆はるこの中よ歌を下しそ
よ稿つしりしをやいふか
白糸の流る青葉の涼く
な

仙人堂岸の竹て立ち

いづしあや

六月雨をちつて早瀬上川

六月三日羽望山をゆる園司た吉

と云者をもあて別高代會竟所

園利も湯す南谷のふ院より

今して憐愍の情こころやう

あ

四日午切をるて俳諧具り

と難や雪をころす南谷

五日推現も活當山用辨能除

大師下いつきの代の人と云るを

とくく延表式も羽鳥里山の中

社とも書字黒の字を里山と

とくくやね鳥里山を中略し

てお黒山ともや出ぬとらつるを

鳥の先羽を以て回の首を獻ると
風上記より体とやうに月山湯を
を合して三山とて當寺武江東
叡の属して天台止觀の有り明
らうに因縁融通の法の灯りけ
るいて僧坊棟をうく終に驗行
法を勵し翠山靈化の驗効
人々思ふる聲業長くしん

とくくは山と謂ひし
八日月山とのりる木綿を
よ引し室冠の頭を包強力
と云ふるをいしれて雪霧山
氣の中は冰雪を臨みのりる
半一八里之より有行をのりて
よ入るはあしは息絶るはて
項上は疎れを日没て有り

笠を坤の條を梳きして外へ
吹きよけ口出て雪清りし
湯屋より下る

谷の傍に銀次少佐とて
の湖に置きしを携て實に繁春
しく銀をとり汝月山と銘を切
て世に貴きし彼龍泉の剣
と評ししや平將莫耶のむしを

とて小道は埴能の枕あさりし
る甲とてぬきし岩に揺りけて
エリヤとてゆりし之天をさし
栞のつらきまはしりしやあゆり
後雪の下はほけて春をさし
まはしりしをのひりしや
梅の花をさしりしや
増ふのやの氣し實にさし

程々として是の如くは山中の
徴細り名の法式として他言
下を禁すし似て業とくわ
坊より此れを所周潤の帯に依
て山順礼の句に短冊より

涼一さやりのこり月の御里
雲の常表の端に月の山
清らかなる所をゆくは秋か

湯金山銭をむる此洞か

羽黒をきて鶴ら周の城下也山
氏重行と云物入ぬの家よむ
られて誹諧一卷有た去り
さうね川舟より来て酒田の漆
より下る洞窟不玉と云語解り
を指とす

何れも山吹浦より夕涼

糸濱や 雨はぬれり 移りては
汐路の 鶴もよめ 海路し

又これ

糸濱や 料理行く 中糸 ちりん

うらぬ高人低耳

世のあやた板とあて 夕涼

岸上 離鳩の巣をこく

ちりん

はなはな びんぼう ちりん

酒田の余飯りも 立て北陸の

ちりんを 遠くふりし 胸をこ

ちりんて 加賀の府まで 百五里

とちりん 風の園も ちりんて 成好

の地も ちりんを ちりんて 中糸

ちりんて の園も ちりんて けろ 九日

暑湿の ちりん ちりんて ちりん

ちりんて ちりんて ちりんて

去來本はくしの針子直物箱

勝峯晋風

去來本おくのほそ道解説

勝 峯 晋 風

いっどこで定稿となつたか

芭蕉の『奥の細道』は元祿二年の奥羽行脚を了つて、いつ、どこで稿を起したのであらうか。去來に云はせると、「年月づだの内にかくして行先くくに隨身し」たのださうで、早く定稿となつてゐたやうだが、實際その「行先くくに」携へて行つたのは、現存の本文通りではなく、若干年を未定稿のまゝで、發句及び文章の推敲に費したのであらうと思ふ。芭蕉の旅信を検すると、元祿二年の意水宛に

佐藤庄司が舊跡に古寺有、一家石碑を残す、義經の太刀辨慶の笈を什物とす

笈も太刀も五月にかざれ番轍

と書添へた發句の詞書は『奥の細道』の本文と前後が一致してゐる。同じく老周宛の名取川、松嶋、塩かま見に侍るに繪師嘉右衛門と云ふ者、やさしきおかしき男にて、こんの染付の緒付たる草鞋二足はなむけにす

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

これも内容に於ては共通してゐる。舉白の著で「元祿二己巳歳八月日」刊行の奥附のある『四季千句』（假題）には

むさし野は櫻のうちにかれ出て、武隈はあやめふく比になりぬ。かの松みせ
見せ遅櫻と云けむ、舉白何がしの名残も思ひ出てなつかしきまゝに

散うせぬ松や二木を三月こし

芭蕉

とあるのは詞書の方が省略されて、發句も「櫻より松は二木を三月越し」と直つて居り、この句解を遅櫻とする通説は芭蕉の本意でなく、實は松の遅れ咲きを詠んだものである事が發句の詞書から考察されるなど、發句の詞書と本文との聯絡一致を見逃してならない一例である。芭蕉の旅中出版されたもので、等躬の著『信夫摺』には

みちのくの名所く心におもひこめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふるみ
ちにかゝりていまのしら河も越えぬ。頓ていはせの郡にいたりて、乍單齋等躬
子の芳扉を扣、彼陽關を出て故人に逢なるべし

風流のはじめや奥の田植哥

芭蕉

これを立句に等躬、曾良の三吟を附録してゐるその詞書も、本文に對照して一見甚だしい

異同の中に一脈の共通點を看却されないであらう。さうして『奥の細道』の本文に掲ぐる發句は前記『信夫摺』に逸句と共に、又、元祿三年刊の燈外著『伊駒堂』には「平泉古戰場」といふ題を置いて、「夏艸や」の句を「路通が語りしを聞て」と註して載せてあり、元祿四年刊の『猿蓑集』には八句を採録してゐるが、『奥の細道』といふ題號を引用したものを見ない。『猿蓑』の選者で元祿三、四年には木曾塚及び落柿舎で芭蕉に親炙した去來が、七年の夏に至つて『奥の細道』の草稿あるを芭蕉の口から聞き、又元祿四、五年に涉つて芭蕉に同行、同庵した支考が井筒屋庄兵衛方から素龍の清書本の刊行されるまで『奥の細道』の存在を知らず、高弟其角すら生前には聞知るところなく元祿十年の冬大阪で筆寫してゐる程なので、『奥の細道』が最後の定稿として素龍の跋を求めたのは芭蕉の晩年即ち元祿七年江戸に於てであらう。『炭俵』の選者野坡が芭蕉の眞蹟を諸門人をさし措いて所藏するに至つた事情は知れないが、野坡が芭蕉庵に出入した元祿六、七年、假に定稿を七年と見れば野坡に授與する生前の口約でもあつたことゝ推測される。

『猿蓑』の幻住庵記が三通傳來して居り、その定稿は去來を通じて彼の兄の向井震軒に出典その他を質疑し、震軒の後語を録して附録してある點から考へて、『奥の細道』の初稿本と覺しきものが曾良に縁故ある信州上諏訪の河西氏の許に、よしそれは副寫本とは云へ

傳存するのと、且つ素龍の跋が定稿に添へてあるので見ると、芭蕉は幻住庵の記に去來の兄で漢學者の震軒から教示を受けたのと同じく、歌人として和學に造詣のあつた素龍に『奥の細道』の本文に就いて相談し、その結果やゝ意に充ちた定稿となつたので、素龍の書寫並に跋を望んだものと推察して差支なからう。さうして素龍の跋に「元祿七年初夏素龍書」とある元祿七年に『奥の細道』は完成されたものと考定してよからう。

孰れを定本と見るべきか

素龍の清書で定稿となつた『奥の細道』は元祿七年の夏、芭蕉が頭陀に入れて伊賀へ携へ行き、舍兄半左衛門の許に残して置いたが、去來から筆寫を望まれて同年十月大阪の病床でこれを諾したので、遷化の後去來は舍兄半左衛門の諒解を求めて、素龍の清書を獲ると共に一本を半左衛門の望みで書送つたいきさつは去來の奥書で明瞭である。元祿十五年井筒屋刊本の『奥の細道』に素龍本は「遷化の後門人が許に有」と見え、支考も『古今抄』に「例の筆者の一字もたがへず、落柿主人を證人にて世すでに書林にひろまり」と記してあつて疑ふべくもないが、杉風から厚爲宛の手簡に「奥の細道去來參候由御見セ奉存候。私儀素龍書申候を所持仕候間則返信」とあるので、杉風も別に一本を所持した譯

である。井筒屋刊本に「眞蹟の書門人野坡が許に有」と云ふのはどうなつたか。嘗て野坡が奥の細道の芭蕉自筆本に就いて或人に報じた手紙を見たが、享保十一年夏、野坡が芭蕉二十三回忌に出板した『放生日』の見返しに「八鳥放生日」と記し、表紙の型を摸した中に「おくのほそ道」と書入れ、その下に「芭蕉翁眞蹟、墨附三十二葉」と註し、香爐を備へてある略圖があるので、その頃までは野坡の手許にまだ保存されたに違ひない。

野坡歿後その所在を逸して了つた。然るに江戸の櫻壽軒と云ふ人が「武陵古き俳家の珍藏なるを風友鶴峯のあるじ、公務のいとま摹して予に送らる」と奥書して芭蕉翁眞蹟と斷じたものが石摺にされて刊行され、私はその一本を所持するが、それが即ち野坡の許に傳はつたものであるとは云へない。従つて野坡の所持した芭蕉眞蹟の『おくのほそ道』は今のところ發見の期待を掛けられないものと云はねばならぬ。

井筒屋刊本には「素龍が跋有今略」とあるので素龍の跋ある完本に關し、芭蕉の渴仰者である蝶夢は「その文章のゆかしかりけるに」と發見を望んでゐるうち明和六年の冬、伊賀上野に掛錫して「古き反古の中に此細道の原本を得」素龍の跋と剩へ去來の奥書すらあるので翌七年十月その跋、傳來を添へて摸刻したものが別にあり、寛政元年の秋には再板されてゐるので、これをこそ『奥の細道』の全貌を傳ふるものとして現に一部には定本視

されてゐるのである。

井筒屋の刊本も蝶夢の翻刻本も本文は同一で異同を見ないが、其角寫本の『おくのほそ道』は明治十八年永機が落丁一枚あるものを補筆して其角の書その儘を摹刻した。本文はほぼ同一で素龍の跋のあることも確められ、且つ其角自筆も現存するので比較研究の便を與へるが、神宮徴古館には乙由の寫本を收藏してゐる。乙由は涼菟門で芭蕉の直門でないから、蕪村が本文の挿繪風に彩畫を入れて副寫したもので、『鬢頭奥の細道』の如き質物視されるものとは相違する蕪村眞蹟（橋本氏藏）と共に、相當價値は拂つてもよいが、定本としては素龍及び去來の二本、それに其角本を加へてその他は參考的に見ておけばよい。『百家交筆奥細道』及び『繪入おくの細道』や「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」を起筆にした天保十四年刊行の『おくの細道』には半化坊選とあつて、闌更傳來本のやうに見せ掛けであるが、それは單に好事家を喜ばせるものでしかあり得ない。

大體の輪廓を傳へた鳥のみち

『奥の細道』の本文が大體發句の詞書を布衍したものでないかと云ふ例證にこゝに引く元祿四年板の『卯辰集』は、金澤から丸岡まで芭蕉を慕つて同行した北枝の補修になるも

ので、しのぶ摺の句の詞書は本文より詳しく、實方塚はやゝ略され、太田の神社は「多田」とあつて「あなむさんやな」と上五のかしらに「あな」の二字が冠らされてをり、北枝と別れを惜んで詠じた「もの書て」の句の中七「扇子へぎ分る」とあつたりして、それらの發句の推敲される以前、即ち初案の形式を存してゐるが、『奥の細道』の全文に涉つて部分的の抄録ながら、確にその定稿後に一覽したものに相違ないものは、元祿十年刊の玄梅著『鳥のみち』である。『鳥のみち』はその部立の都合で本文を解體して、順序を變更してゐるけれど、千住から大聖寺までの發句から十二句を抄出し、その前書は『奥の細道』の本文と全然同一である。たゞ仔細に検討すると文字の出入と異同が相當にあるので、井筒屋刊本の奥書に「草稿の書故文章所々相違す」と云へるに合致するやうである。たゞ一個所だけ、

仙臺に入てあやめふく日也、旅宿に趣き、畫工嘉右衛門と云もの紺の染緒付た

る草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの爰にいたりて其實をあらはす

あやめ草鞋にむすはん草鞋の緒

翁

とあつて、前に擧げた老周宛の書翰中の詞書により多く似て、本文に宮城野を案内された記述を全く逸してゐる。その他は

井筒屋本

佛頂和尚山居跡あり

と、松の炭して岩に

書付侍りと

今日は親しらす

枕よせて、寐たる

古郷にかへす文

御跡をしたひ

大悲のめぐみ

と、まる方おほし

云捨て出つ、

一笑と云ものは

ほのく聞へて

大聖持の城外

といふ寺に

鳥のみち

佛頂和尚山居

松の炭して岩に

かきつけ侍しと

けふ親しらす

枕引よせ寐たる

ふるさとへかへる文

御あとしたひ

大悲の御めぐみ

泊る方おほし

いひ捨て出

一笑といふもの

ほのく聞えて

大聖寺の城外

といふ所に

と残す一夜の

讀經聲すむまゝ

心早卒にして

若き僧とも

折節庭中の柳散れば

庭掃て出るや寺に散柳

と残る一夜の

讀經の聲澄まゝ

心さし早卒にて

若き僧とも

おりふし柳ちれば

庭はきて出はや寺に散やなぎ

かうした違ひが見られるので、『鳥のみち』に全文を擧げてあつたらば『奥の細道』の孰れが定本なりやを判断する有力な資料となつたであらう。それはともあれ『奥の細道』が井筒屋から刊行される六年以前、この『鳥のみち』で本文の輪廓が流布したので、其角の筆寫を間接に促したことも考へられる。これは『鳥のみち』の序に「元祿十丁丑春三月上浣」とあるので『鳥のみち』の方が早いからである。井筒屋本の刊行されるに至つたのも『鳥のみち』及び其角の筆寫などが、その出板動機となつたのであるかも知れない。

最も信憑すべき去來本の發見

明和六年に蝶夢が伊賀上野で発見した去來本『おくのほそ道』に就いて、伊賀上野の村治圓次郎氏と語つた際、氏からたゞう包みの上に『おくのほそ道』と書いて、行成表紙の題箋には金の眞砂散らしの僅に光り、「おくのほ」とだけは明瞭で「そ道」とあるべき部分を手擦れで剝落した一本を見せられた。本文の紙のどことなく光澤があり、時代的のくすみを持つてをり、墨色とその濃淡の工合が元祿時代の影寫本に相違ないので、これこそ蝶夢の発見した去來本であることゝ思つて本文を比較研究した結果、蝶夢の発見したのは村治氏所持のものとは別の副寫本であることが判然した。従つて眞の去來本としての價値はこの書に存することを確信するに至つたのである。即ち本文の紙數は野坡所持の芭蕉自筆本が『墨附三十二葉』とあるに對し、これは去來の奥書の如く五十三丁あつて、初終に各一丁の白紙があり、堅五寸五分、横四寸七分、曲尺で測つてまさにその通りである。表紙の模様は井筒屋刊本が藍色の格子形であるのに、これは萌黄色の山形重ねで、雲母の箔をおいたやうな光澤をおびてゐる。綴ぢ絲は奥書に紫とあるが、これは鶯茶色の絹絲二本でかゞつてあるのが違ふだけである。

井筒屋刊本即ち素龍本と本文の異同を検するに、

素龍本

去來本

いつれの年よりか片雲	いつれの年より片雲
見送るなるへし	見送なるへし
末をかけて其日漸早加	末をかけ其日早加
申侍まゝ一夜	申侍るまゝ一夜
たすけ玉ふにやと	たすけ玉ふににやと
衣更の二字	更衣の二字
直道をゆかん	直道にゆかん
かし侍ぬ	かし侍りぬ
結付て	結ひ付て
風驟の人	風驟の人
山居跡あり	山居の跡あり
十景盡る	十景つくる
清輔の筆	清輔か筆
白河の關	白川の關
柱にも此木を用玉ひ	柱にも木をし玉ひ

佳命今に

潮をたふ

大伽監とはなれりける

しらぬ道まよひ

大河に落入康衡

人を頼侍れは

舎を求む

出羽といへるも

湯殿にぬらす

あつみ山や吹浦

したひ侍ん

宿かすものあるましと

鐘板鳴て

庭掃て出るや

舟に棹して

佳命今に

潮をたふ

大伽監とはなれりけり

しらぬ道まよひ

大河に落入る康衡

人を頼み侍れは

食を求む

出羽といへるは

湯殿ぬらす

あつみ山吹浦

したひ侍らん

宿かすものありかたしと

鐘板鳴りて

庭掃て出はや

舟に棹さして

三里計

旅の物うさも

三里斗

旅の物うさも

右に徴して去來本は素龍本よりは送り假名を正しく使ひ、去來本には「此木を」の「此」
 「湯殿に」の「に」の如き落字の明かなるもの、更に指摘すれば「小黒崎」の「小」が「ホ」
 に、「方寸を責」の「責」が「貴」に、「秋田にかよふ道遙に」の「遙」が「祭」の草體に見
 え、確に誤字と思はるゝものが無いでない。又、「坐」が「座」に、「寐」が「寢」に、「秋」
 が「採」に、漢字の「跡」及び「猶」が「あと」又は「なほ」と假名であるのは單なる筆
 癖と見るべく、それから「劍」を「釧」と誤り、「元祿」の「祿」が衣扁であり、「伽藍」
 の「藍」の艸冠を脱せるなどは、素龍、去來兩本とも同様であつて咎むるにあたらぬが、
 全昌寺にての發句は去來本には

庭掃て出はや寺に散柳

と「出ばや」の願望の「はや」が鮮明に書いてあつて、素龍本には

庭掃て出るや寺に散柳

と「るや」とより見えぬのは何意が隔絶するので、この「は」と「る」との問題は重

要である。併し『鳥の道』にも「はや」で其角本も同じく「はや」であるから、素龍本の「るや」は誤寫と決しなければならぬ。「は」の變體の「そ」を「る」に書紛れないとは限らないので、素龍本の「る」を熟視すると「は」の彫くづしでないかと疑はれもする。蝶夢本は跋と奥書を附したのみで、本文は素龍本を再び板下としたやうで、一字といへども異同がないから、こゝも勿論「出るや」となつてゐる。蝶夢本がこゝに複製した去來本とは別の副寫本を恰も眞の去來本として取扱つた證には

蝶夢本

去來本

今將た足。下に

今將そこ。

つとくくに倡送る

つとくくに謂送る

捧侍りなん

捧け侍なん

涙を落しぬ

涙おとしぬ

足の許へ。

足のもとに。

能書をゑらふによし

能書をゑらふによし

なくやゝその製

なく拙き筆をはし

らかしぬやゝその製

斯の如く異同があり、特に「倡」の字の傍に「本ノマ、」と註してあるのは何とも判讀し得なかつたからであらうが、それは去來本には明白に「謂」の字であつて蝶夢が見たならば「倡」などゝ迷ふ筈がない上、肝要の「拙き筆をはしらかしぬ」といふ十字を脱してゐる。又、素龍の跋には蝶夢本には「跋」の字がなく、結語の「置そふぞ」が其角本と同じく「置そふるぞ」となつてゐる。村治氏藏去來本の信憑すべきは蝶夢本との比較によつてます。確めらるゝのである。

去來本の全貌再現のために

『おくのほそ道』の最も信憑すべき善本としてこゝに複製した去來本は、その體裁及び影寫の倂を保存するため、充分の注意と努力を拂つたものであることは、直接これを手に取られた何人でも必ず首肯されるであらう。試みに裏表紙をまくつて熟視されたなら、そこに微かに文字の隠見するのを認められるであらう。これは「折に」の二字で、影寫に際して一枚書損したものを裏紙に使用したことを證するもので、本文の十七丁表「折にふれたりと」の初行二字である。又、二十丁裏の「野田の玉川の石」の右傍にある「沖」の字は、影寫即時脱字に氣づいて補ひ添へたので、二十三丁裏の「雲居禪師の別堂」の「堂」

に、を施して、右傍に「室」とあるのも同様で、その再現はコロタイプ刷として容易な當然な仕事であるが、影寫の折に書損した文字をその上から筆でなぞつて訂正した箇所、たとへば本文八丁表の「日夜語つゝけて」とある初行の「つゝ」は墨附が濃く太く、最初「語て」と書損して慌てゝ「て」の上に「つゝ」となぞつたものであることが解るやうに再現するには、なみ／＼ならぬ苦心と技術を要したのである。仔細に見て行くと「扇的を射し時」の「射」、「人の教ゆるにまかせ」の「ま」、「昔もかく」の「く」、「寶燈有」の「有」、「煙立つゝ」の「つゝ」、去來の跋の「はしらかしぬ」の「ぬ」の如き、殊に「釧を淬」の「淬」(にらぐ)は誤讀をおそれるか、墨を濃くして明確にその字をあらはさうと努めた影寫心理が窺はれるであらう。本文の蟲喰ひも十丁裏の「戸部某」の「戸部」を中斷して、左斜めに「折／＼に」の「折」の字にかけてあるのを淡墨の陰影で再現した手際も巧みであると思ふ。それに用紙の吟味、墨色の濃淡、表紙模様、製本の寸法、綴ぢ糸、たゝう包みに至るまで、一として原本に違ふところなく、去來本の全貌を再現して遺憾なきを期したことを附言したい。

終に本書の複製を快諾された村治圓次郎氏の好意及び岩波書店布川氏の複製本に拂はれた援助を感謝したい。

お断り

原本のたとう包みは一枚の薄い奉書で作られた粗末なものであり、既に一部は破損し、且つ、取扱に不便のため、この複製本には之を廢し、特に吟味の上、堅牢な體裁のよいものを以て代へることとした。尙、この題簽の文字は、原本跋文より便宜とつて利用したものである。

作れらるゝ家　く　ハ　ア　と　い　は　し
ま　う　方　の　あ　り　一　人　の　の　り　あ　う
ま　て　し　一　一　神　明　の　加　護　を　あ
ま　な　ま　う　一　一　と　い　捨　て　出　つ
ゝ　秋　の　こ　り　一　一　や　ま　の　こ　り　一　一
一　家　の　花　を　か　け　し　ら　う　の　秋　の　月
あ　ら　ま　の　こ　り　一　一　書　き　し　ら　う　の　秋　の　月
く　ら　一　四　十　八　の　秋　の　月　や　お　し　ら

ぬ川をわたりて那古と云浦の
出帆の春の浪春らうしうとも
沖秋の氣とぬへりしうとも
人の思れと乞しうしうとも
伊ひしてむしうしうとも
誓の道ゆるとすうらたをす
の2夜の船よりよあはし
いとをとはれてこの道入

この香やを入右と云後うし

巾の道山よりうら谷をこえて
金比ハ七月中の五口く害
大坂よりうら商人何と云る
と云れり旅宿をとこりす
一笑と云しうしうとも
かみ 世は知人も
あはれしうの兵と云世と云

追善を催す

縁に動け永泣多き故の風

おのゝちをよみていさなれて

煉原の毎よむけや瓜茄子

途中吟

あうくよ日難西しあふ風

小松と云ふ下り

とをくよ名や小松吹流

此處古田の地社よ清き盛なり

甲端の印あり 往昔源氏なり

属より一町義朝とありまゝを

流さうやふしお士のりのあらし

月夜より吹返りしうて菊う

草のりりし 金をとりしと龍頭

り蹴蹴なりし 志盛討死のは

木曾義仲頼朝よりけし社

よら〜北條〜植口の法部
うは〜
記〜

むんぢを甲へ下せまらさ
山中の温泉より かの山根
の嶽は〜
たの山降〜観音堂あり
山の法字〜之下の噴れ

こり〜を〜しては 大慈大悲
の縁〜を〜して 那谷
と名付多ゆ〜や 那智谷地の
二字をわ〜り たり とき 奇
石〜
堂ゆ〜り 小堂名の上〜
造〜
石山へ石〜り け〜 雑の凡

温泉に浴す且つ印を明に次へ

云

山中や菊の香をぬるの句

阿のくしとすあはれ来る物と

いよしの山童といれつ又詠諧を

好む浴へ自室もあまのむら

室より耳に比風推し摩し

うられ浴にぬる自徳の門人

ころけし世はさうさう 切各の

ほけ一村判詞は料を清く

云今又むらう論といふらぬ

曾らんの腹を病み伊勢の

関の徳と云ふよゆらあれを

先主てしり

りくつきあれ伏し秋の系

とさ置いりりりりりりりり

つひに詠ふよをみせて

ゆきてふりゆく金取か

五丁山よ入て永平とと礼
す道元孫師のゆきく都機
ありと通てくく山陰
後ものくくくく青い
とと

福井の三里中へねとく飯

とくくくくくくくくくく

後くくくくくくくくくく

たふ隠士さいつくのもの

江戸よりあつてくくくく

十とを餘りくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

引入てあやしの小家より思
をらまのこえうりて鶏頭を
やぐも産らるるこくすさんい
げくらよこふと門を和と信し
きなる女の生てつくがかり
のり多るるのほ坊やあや
けあしほしとこりのさふり
ぬりし月あしとる多くとりふ

これり書きしととと
むししゆしとととと風
情は竹れとやうてあやひて
きのみふり二夜とととと
各月うつととととのみととと
きん立等哉し共よとととと
裾おうしとととととととと
おとととととととととととと

いふれて此那の言なり
あまの信をいふて玉の
の蓋に信をいふて言
の関をいふて師は言と
知れと極に誠りて中
よゆ所をいふて十四日の
いふて言の津に宿を
いふて言は月津信り

あまの言はもいふて言
いふて言は言は言は
の信情をいふて言は
よ酒をいふて言は言は
よ言は言は言は言は
廟又社頭をいふて言は
の同一月の言は言は
の言は言は言は言は

從骨遊り二世の上人大願
及發起の事行りてさうさ
と利土石とありに泥濘と
うはうとて糸活羅集の如
き古例今もさうす此前
も志砂をありしをこれと
遊りの砂指とP傳ると亭之
の

月信 遊りののり

十五日亭之の詞よむうをす
雨降

名月や小園日私定う
十六日夕雲きれもす
小貝ひろく種の漬もあを
をう海上七里あり矢を果
と云ふの破籠小竹筒

わりよとくしちさ皆僕あしこ
みよとくしちさて述風時の
まを吹まわ瀆わりのり
る海士の小家にて信
ふは花ちりり宴に茶を飲
酒をいづるて夕くれめさ
こしは武の地なり

舟のりよ酒のりよ
濱の舟

浪のりよ小貝よま
其の舟

其日のりよ
等哉

筆のりよとてちよ

露通しけみやまのりよ
てこのりよ
まのりよ
入るるるる
事り合哉人

戸のあけりし奇景をいりせんす
うて百枚の情を後人の
むと翫よそりしり旅を
つらうらふはけしはは
やしの人のいよよとて
眉のよのよをいれり

元禄七年初夏素行

此巻は古師道蕉翁の紀りなりて素紙
に書きたる書の長身みまうと申す七ふ紙
のまめをよゆはく白紙と行成の長紙
紙のいよひてとらふ紙は金のまめら
しむる白紙のうらう奥の細くちと
書は月つる此のふらうては先く
後者一まめまめは紙七枚のまめ
月平の方と偶長うらうてくくほの

まゝに書かざりては言ふれにお
くちやうふ口は國のぬの旅ぢのせう
ちいぢのひしはに葉のんしの
の縁えぢりしはに葉のんしの
ちよまうつしはに葉のんしの
のんちのしはに葉のんしの
ぢのんちのしはに葉のんしの
ぢのんちのしはに葉のんしの

諸字落字のおほいんちのんち
のんちのしはに葉のんしの

濡付のしはに葉のんちのんち

門生
去来録

元禄八乙亥歳九月十二日

於嵯峨後柿舎書字焉

